別記様式第2号（第4条関係）　　No.＿＿＿

論文内容の要旨

専攻名 （課程名）	多文化社会学専攻 （博士前期課程）	氏名	申　若晨 シン　ジャクシン
題名	華僑伝統文化の伝承に関する研究 ―長崎崇福寺の年中行事を中心に―		

本論文は、長崎における華僑伝統文化の伝承をめぐる現状とその変容過程を、崇福寺の年中行事を中心に検討したものである。問題意識として、近年の長崎華僑社会では人口減少や高齢化、世代交代、日本社会への同一化の進行により、従来の祭祀や年中行事の担い手が減少し、伝統文化の継承が困難になりつつあるという現実がある。これまで崇福寺の祭祀は、華僑の信仰実践であると同時に、親睦の形成、華僑意識の醸成、伝統文化の継承を担う中核的な社会装置として機能してきたが、21 世紀以降、その役割や意味が大きく変化している。本研究は、こうした変化を単なる「衰退」としてではなく、文化が社会変容の中で再編成される過程として捉える必要があるとの問題意識に立脚した。先行研究の動向としては、長崎の唐寺や崇福寺の歴史、華僑社会組織、祭祀や芸能に関する研究が蓄積され、華僑文化が地域社会との関係の中で形成・展開してきたことが明らかにされてきた。一方で、担い手の世代交代や華僑人口の減少が進行する現代において、実際に祭祀や年中行事を支えている人びとの語りに基づき、文化継承の実態と意味変容を総合的に検討した研究は十分ではなかった。そこで本論文は、文化を固定的な伝統ではなく「意味のネットワーク＝象徴の体系」として捉えるギアツの文化解釈学を理論的枠組みとして採用し、フィールドワーク、インタビュー調査と文献調査を組み合わせて分析を行った。研究の目的は、第一に、華僑当番の継承者が減少する中で、地域社会に定着した崇福寺の伝統的年中行事がどのように維持されているのかを明らかにすることであり、第二に、21 世紀以降の社会条件の変化を背景として、崇福寺の祭祀とその社会的役割がいかに弱体化し、同時に再定義されてきたのかを解明することであった。分析の結果としては、第 1 章では、江戸期の唐人屋敷制度に始まる長崎華僑社会の形成過程と崇福寺の歴史的展開を整理し、両者が相互に規定し合う関係の中で発展してきたことを示した。第 2 章では、元宵節、普度、媽祖祭などを担ってきた華僑関係者の語りから、輪番制や寄付を基盤とする従来の継承構造が持続困難な状況に直面している一方で、担い手が崇福寺を歴史文化的象徴として位置づけ、行事を「支える人」へと主体性を変化させながら継承を模索している実態を明らかにした。第 3 章では、崇福寺の祭祀が華僑内部の宗教実践にとどまらず、長崎地域社会との関係性の中で親睦、華僑意識、文化継承という役割を組み替えながら存続していることを示した。結論として、本論文は、崇福寺の年中行事を通じて、長崎華僑伝統文化の継承が衰退と再生、断絶と連続という二重の過程の中にあることを明らかにした。文化とは過去から固定的に受け継がれるものではなく、社会的関係の変化の中で意味づけ直される動的な実践であり、崇福寺はその象徴的中心として、新たな意味秩序を生み出し続けてきた。本研究は、華僑文化を地域社会との相互行為の中で解釈する視座を提示した点に意義があり、今後の華僑研究および地域文化研究に対する基礎的知見を提供するものである。

※作成に当たっては，文字は10.5ポイントでA4用紙2枚以内とする。